

色んな幻聴や幻覺が起つて來た。

僕は三四日間は十分に覺えては居ないのだ。

癡痺狂患者の自己忘却か、佛教でいふ無我の境地にでも没入してゐたのかも知れない。

全身の肉がうんで、すえたやうで、とてもたえられないだるさと、心臓の脈迫感だけで、呼吸も六にしてゐなかつたように思ふ。

隣りの留置場で引つばられてきた酔つ拂ひが、刑事にドナラレてゐる。

ドタバタ騒ぐ。

其の問答が面白いのだ。

僕は笑つた。やかましくて不可ない。

眞夜中に立ち上つて僕は吼えつゞけた。

屋根に雪が積る音がする。

風がスコ／＼吹き荒れてゐる。

板敷に霜柱が立つのである。